

第5章 親の子育てと子どもの自立

放送大学 教養学部 教授 宮本 みち子

要旨

本章では、若者の自立が、親の子育て方法や、子どもへの言動とどのような関連性を持っているのかを検討する。着眼点は3点である。第1点は、子育てにおいて親たちは何を重視してきたのか、それが子どもの自立とどのような関連性を持っていたかという点である。第2点は、若者にとって、社会への関心・社会参加への意欲は、成長過程の諸要因に影響されて形成されると思われるが、親はどのような役割を果たしてきたのかを探るといふ点である。第3点は、親に関して、仕事の世界へといざなう社会化機能の弱体化が指摘されて久しいが、子育ての方法や子どもへの言動からその実態を探るといふ点である。

第1節では、分析の枠組みを説明する。第2節では、親の回答から、子どもが小学校のころの子育ての型を探り、それぞれの型の特徴を見る。第3節では、親の子どもへの言動から、自分で生きていくことや、自分で考え行動すること、経験を積むことを、自立促進型と名付け、その実態を押さえる。また、子どもが小学校のころの子育てとの関係を見る。さらに、子どもの回答から得た親のイメージ、親の仕事の認知、親の人生の評価が、親の自立促進の程度とどのような関連があるかを見る。第4節では、子どもの社会志向性を規定する要因を、親子関係に着目して分析する。第5節では、子どもの自立規範を規定している要因を分析し、さらに、「将来の夢があること」を規定している要因を分析する。分析の結果から、勉強と社会体験の両立志向型子育て、子どもの自立促進志向（以上は子育てタイプ）、「父親の仕事を知っている」、「父親の人生は生きがいのあるもの」（以上は親子関係）、という4つの要因が、自立の諸側面にプラスの効果があることが分かった。さらに、これらの要因が、子どもの社会志向性を高め、自立規範を強化し、将来の夢を持つことを可能にしているという知見が得られた。

第1節 分析の目的と枠組み

1 分析の目的

本章は、親の子育てに焦点を当てて、若者の自立が、親の子育て方法や、子どもへの言動とどのような関連性を持っているのかを検討することを目的としている。子育てにかかわる意識や方法は、国、地域、民族によって異なる。現代日本の子育てに関しては多くの言及があるが、思春期からポスト青年期の子どもを持つ親たちの特徴はどこにあるだろうか。また子育て意識や子育て方法の違いはどの

ような要因から生じているだろうか。さらに、若者の自立過程の特徴が、親の子育て方法や親子関係とどの程度関係しているだろうか。本章は、このような問題意識に立って分析を進める。

テーマの背景を述べておきたい。この調査は、対象年齢が思春期から若い成人期に及んでいることから、青少年が一人前の状態に達する過程を概観できるように設計されている。その過程で、親は子どもを学校教育の世界から仕事の世界へ、私的世界から公的世界へと橋渡しする役割を担っている。しかし、近年では成人期への移行が長期化しており、親からの自立に長い時間を要するようになってきている。自立の契機も一様ではなく、成人期への移行過程は、個人化しつつある。それに伴って、大人としての役割取得、社会への関心、責任や義務の自覚もあいまいな傾向にある。このような社会状況の中で、親はどのような意識と方法で子どもを育て、子どもの自立達成にどのような影響を及ぼしているだろうか。

本章では、次の4点に着目して親子の関係を見ていくことにする。

第一は、子育てにおいて、親たちは何を重視してきたかという点である。近年まで日本では、学校で努力して成果を挙げれば将来の成功につながるという信念が広く行き渡る状況（メリットクラシーの大衆化）（荻谷 1995）があった。その背後に信念を支える家庭教育があった。親の高い教育志向性があるからこそ、子どもにお金をかけることをいとわず、働き始める時期を延期して学校にとどまることを親は期待してきた。また、教育成果を挙げるためには、子どもがそれ以外の活動に時間を割くことを奨励しない、あるいは期待しないという傾向があることが、多方面から指摘されてきた。しかし、実際のところ親の教育志向性は均質ではない。しかも1990年代以降、非高学歴階層出身の生徒が、学習をめぐる競争へと動因されなくなり、生徒たちが学校より学校外へとコミットしていく「脱学校化」が進んだことが指摘されているが（樋田、耳塚他 2000）、それは親の意識変化とも連動している。こうした変化を念頭に置いて、子育ての諸相を、親の子育て意識から見ていく必要がある。

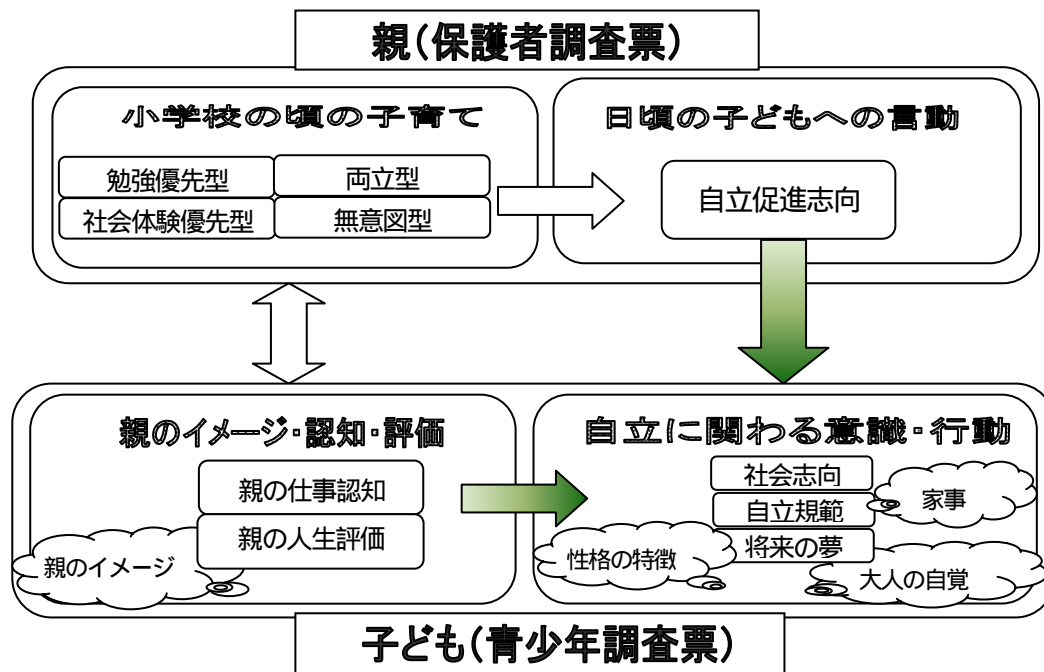
第二に、近年のフリーター・無業者増加に見られる学校から職業への移行の困難の背景に、成長過程における社会経験の不足があり、その背後に家庭の職業的社会的力の低下しているという状況がある。職業モデルとしての親の不在、職業の世界へといざなう親の社会化機能の弱体化が指摘されて久しいが、その実態とその影響を押さえる。また、国際的に見ても親への依存傾向が強い日本の若者（宮本・岩上・山田 1997；山田 1999；宮本 2004）が変わる契機はあるのか、あるとしたらどの辺にあるのかを探る必要がある。

第三に、成長過程で、社会的・公共的世界へと若者の関心は広がっていくはずであるが、現実には若者の社会的関心は低く、社会活動への参加も限られている。親の側にも、社会への参加を子どもの自立目標とするという認識は、必ずしも明確ではない。社会への関心・社会参加への意欲は、成長過程の諸要因に影響されて形成されると思われるが、親はどのような影響を与えてきたのかを探る必要がある。それを通して、若者の社会志向を高めるための子育ての可能性を探ることになるはずである。

2 分析の枠組み

本章では親子セットデータを用いる。図 - 5 - 1 は、分析の枠組みを描いたものである。保護者調査票からは、子育てのタイプに着目する。一つは、子どもが小学校のころの子育て（保護者 Q3）として、勉強優先、社会体験重視という2つの特徴を組み合わせ得られた4つの型（勉強優先型、社会体験優先型、両立型、無意図型）を用いる。もう一つは、日ごろの子どもに対する親の言動（保護者 Q4）から自立促進志向という変数を用いる。青少年調査票からは、2つの側面を見る。一つは、親に対するイメージ、あるいは自分と親との関係や親に対する認識である。特に「親の仕事を知っている」「親の人生は生きがいのあるもの」（青少年 Q6, Q7）という2つの項目に着目する。もう一つは、自立にかかわる意識や行動の実態である。ここでは、社会志向、自立規範、将来の夢という3つの概念を用いる。これらと併せて、大人の自覚の有無、家事の実践、性格上の特徴も見る。

図 - 5 - 1 分析の枠組



親の子育て意識や方法、そして日ごろの子どもに対する言動から、子どもは何らかの影響を受け、また親に対する認識や評価を下している。その結果として、自立に向けて独自の意識を形成し、自立するために行動するだろう。本章では、親の自立促進志向が、自立にかかわる意識・行動に影響を及ぼしているのではないかという仮説を立てる。両者の関係はストレートな規定関係と、親のイメージや親に対する認知・評価を経由する規定関係とが混ざり合ったものであろう。その実態を探る。

親子双方の性別、年齢という基本属性はもちろんのこと、学歴、職業、経済水準など社会階層は、この分析枠組みにおける重要な規定要因として扱う。地域も重要な要因であろうと予想されるが、時

間の制約から今回の分析では扱わなかった。

記述の順序を簡単に説明しておきたい。第2節では、親の調査票から、子どもが小学校のころの子育ての型を選定し、それぞれの型の内部構造の特徴を探る。第3節では、親の調査票から、子どもへの言動に現れた子育ての特徴を探る。ここでの着眼点は、自分で生きていくことや、自分で考え行動すること、経験を積むことなど、自立促進的な言動をしている親、そうでない親がどのように分布しているかを見ることである。また、子どもが小学校のころの子育てとどのような関係にあるかを見る。さらに、子どもの回答から得た親のイメージ、親の仕事の認知や評価、自立にかかわる行動が、親の自立促進の程度とどのような関連性があるかを見る。第4節では、子どもの社会志向性を規定する要因を、親子関係に着目して分析する。第5節では、子どもの自立規範を規定している要因を分析し、さらに、「将来の夢があること」を規定している要因を分析する。

最後に、このテーマを扱う際、留意すべき点を整理しておきたい。調査対象年齢は15歳から29歳の幅を持っている。この時期の年齢の違いは大きく、特に在学中の者とそうでない者では意識も行動も異なる。それがコーホートの違いからきたものか、ライフステージの違いからきたものかを見極めることは難しい。両者が混在していることに留意する必要がある。また親の子育て方針に関しても、子どもの発達段階によって変化するもので、在学中と社会人となってからは当然異なるはずである。また、例えば小学生時代の子育て方針を聞く項目では、15歳の対象者にとっては数年前の記憶であることが、29歳の対象者にとっては10年以上前の記憶だということになる。その点で、年齢幅のある人口集団を対象とした調査の難しさがあることを踏まえておきたい。

第2節 親の子育て方法

1 小学校のころの子育て

この節では、親の回答から子どもが小学校時代の子育て方法を探る。まず、概況を押さえておこう(保護者Q3)。子育て方法を表す7項目を示し、あてはまるかどうかを聞いた結果を多い順に示すと、「子どもの希望はできるだけ聞く」(79.6%)、「できるだけ外で遊ばせた」(78.9%)、「生活習慣を厳しく」(69.7%)、「いろいろなことを体験させた」(66.6%)、「塾や習い事などに積極的に行かせた」(45.6%)、「あまりかまってやらなかった(放任)」(33.0%)、「成績が上がるよう熱心に指導した」(32.9%)となっており、「子どもの希望を聞く」、「外で遊ばせる」の2項目については、約8割の親がこれに当てはまると答えている。「生活習慣」、「体験」の2つはやや少なく7割である。「成績」や「塾・習い事」が当てはまる親は半数を下回る。また、「放任」は3割と少ない。このような回答から、子どもが小学校のころには、勉強より外遊びや体験を重視し、何よりも、子どもの希望を優先していた親像が浮かぶ。

そこで、本章の問題意識に従って、「成績が上がるよう熱心に指導した」(教育成果志向)と「いろいろなことを体験させた」(社会体験志向)の2つに着目し、この2つを組み合わせた。そこに4つの

型ができるが、これを、勉強優先型、社会体験優先型、両立型、無意図型と名付けた。4つの構成割合で最も多いのは、社会体験優先型で40%、両立型と無意図型が25%前後、勉強優先型は少ないという構成である。そこで、どのような親・家庭が4つの型に分布しているかを見てみよう。

まず、親の属性で見ると、両立志向型、勉強優先型は父親より母親に多く、社会体験優先型は父親の方が多く、父母ともに、社会体験を重視する傾向はありながらも、母親の方が教育の担当者として、より現実的に子どもの勉強にかかわっている。さらに親の経済水準（現在の暮らし向きを用いる）、学歴で見ると、社会体験優先型、両立志向型ともに、暮らし向きにゆとりがあることが特徴で、特に両立型にその傾向が強い。また、高学歴に多く、職業では管理・専門・技術・保安職に多い。他方、無意図型は暮らし向きが苦しい方に多く、職業は技能・生産工程・運輸従事に多く、事務・販売がそれに続いている。

2 子どもから見た親との関係

子どもの調査票は、子どもから見て親は日ごろ自分に対してどのような接し方をしてきたかを聞いている(青少年Q6、Q7)。その結果を多い順に示すと、「私にやさしくあたたかい(父46.2% 母50.3%)」「私にいろいろ話す(父32.3% 母54.8%)」「私のことをよくわかっている(父29.5% 母49.7%)」「私に対して厳しい(父20.3% 母18.4%)」「私の仕事や勉強・成績についてうるさく言う(父10.3% 母20.3%)」である。子どもから見た親の印象は、やさしくあたたかい親像であり、厳しさをうるささのない親像である。特に母親は、よくわかってくれ、よく話しかけている親像であり、それに比べると父親は具体的なかわりを持たない親像である。子どもに対して父親と母親は明確に役割分担しているといえよう。

全般的な傾向としては、在学中は高学歴層の母親が「勉強にうるさい」傾向があるが、それも年齢とともに減少していく。親は同性の子により厳しく、しかし理解している程度も勝っている。父親と息子の間のコミュニケーションは母親と娘の間よりは少ないが、それも年齢が高くなるにつれて、さらに結婚するにつれて改善され、息子の自立に従って相互理解が増していくという関係にある。一方、母親と娘の関係は、より直接的で親密である。父-息子関係と同様に、母は娘により厳しいが、同時によりわかり合っている面があり、娘に対して「よく話し」「優しくあたたかい」関係にある。父親も母親も、性役割の違いを前提にして、息子には勉強や仕事の成果を求めるためか、娘に対するよりも息子に対して、「勉強や仕事をうるさくいう」傾向が見られる。

一方、子どもの親への理解の程度を見ると、「父(母)の仕事についてよく知っている」は、父26.2%、母25.9%、「父(母)の人生は、私からみて生きがいのあるもの」は、父16.7%、母15.5%である。

このように、「父母の仕事を知っている」という回答は3割を下回っている。年齢が上がると多少増加するとはいえ、それほど大幅に増加するわけではない。在学学生はともかく、社会人である子どもの

理解は決して高いとは言えない。親の仕事を知っている程度は、親が自営・自由・家族従業者の場合はやや高いが、それ以外の職業に関して差が明確ではない。親の人生への評価も低い。これらの数値は、年齢が上昇するとやや増加するが、親子関係が「やさしさ」に特化し、親子をつなぐ具体的な実体が欠けているという印象を受ける。一方で、「親は私のことをわかっている」割合が半数に近いことと比較してみても、親子が相互に理解し合っているという関係ではなく、親が子どものことを分かっているほどには、子どもは親のことを分かっていない。親の子どもに対する思いは一方的と言わざるを得ない。

第6回世界青年意識調査（総務庁）の結果によれば、父子関係に関しては、日本以外の先進国の父子関係は平等的であり、発展途上国ないしアジア諸国では父権主義的である。一方、親子間の心的距離は、どの国でも母子間ではかなり親密だが、父子関係に関しては国による違いが大きく、日本では青年期になるとその距離はかなり拡大するという知見が得られているが（藤田 1999：27）、同じ傾向は今回の調査結果からも指摘できる。その上、家父長主義の国々の父親が「生き方、行動の仕方、道徳などの社会生活について指導を受けたこと」に関しては、ロシア、イギリスと並んで、日本の値は低い。しかも5年前の調査以来、増加していない唯一の国である（藤田 1999：21）。

これらの傾向が、小学校のころの子育てタイプとどのように関係しているかを見てみよう。用いる項目は、「父（母）は、私の仕事や勉強・成績についてうるさく言うほうだ」（教育成果志向）、「父（母）は、私に対していろいろなことを話すほうだ」「父（母）の仕事についてよく知っている」「父（母）の人生は、私からみて生きがいのあるものだ」の4項目である（青少年 Q6, Q7）。

これらすべての項目において、親の小学校時の育て方のタイプによる違いが見られる。4タイプの中で、無意図型と勉強優先型には、親子の関係の点で似通った傾向が見られる。親の教育成果志向に関しては、小学校のころから現在までの時間的経過があるため、例えば小学校のころ、勉強優先型であっても、最近では「うるさくいう」が少なくなっている。しかし、それでも明らかに2時点の関連性があり、子育てには一貫した傾向があることがうかがわれる。勉強優先型の父親に関しては、「私にいろいろ話す」割合が低い。無意図型にも同様の傾向が見られる（図 - 5 - 2）。また、「生きがいのある人生」という子どもの評価も低く、これは無意図型の父に対する傾向と似通っている（図 - 5 - 3）。母親に対しても似た傾向が見られる。「父の仕事を知っている」に対しても同様な傾向が見られる（図 - 5 - 4）。差は大きくないものの、勉強優先型、無意図型において、「親の仕事を知らない」が多いという特徴は見られる。こうしてみると、勉強優先型も無意図型も良好な親子関係の不在、コミュニケーションの不在、あるいは、関係性の希薄な状態を内在している可能性がある。

図 - 5 - 2 「父は私にいろいろなことを話す」-親の子育てタイプ別-

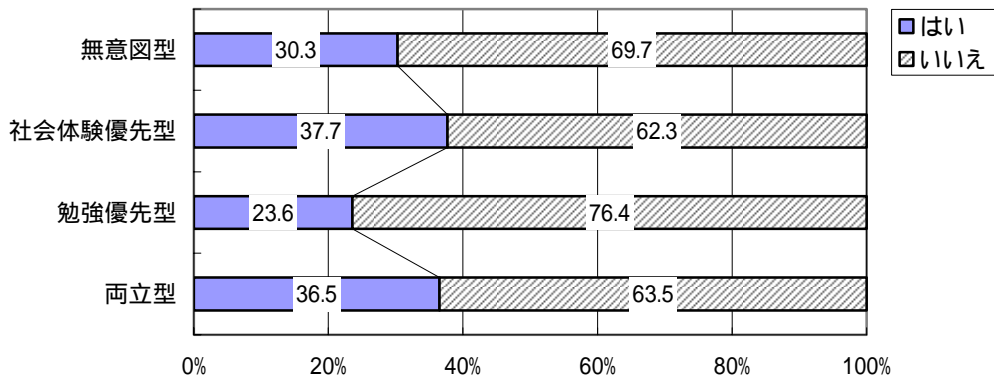


図 - 5 - 3 「父の人生は私からみて生きがいがある」
-親の子育てタイプ別-

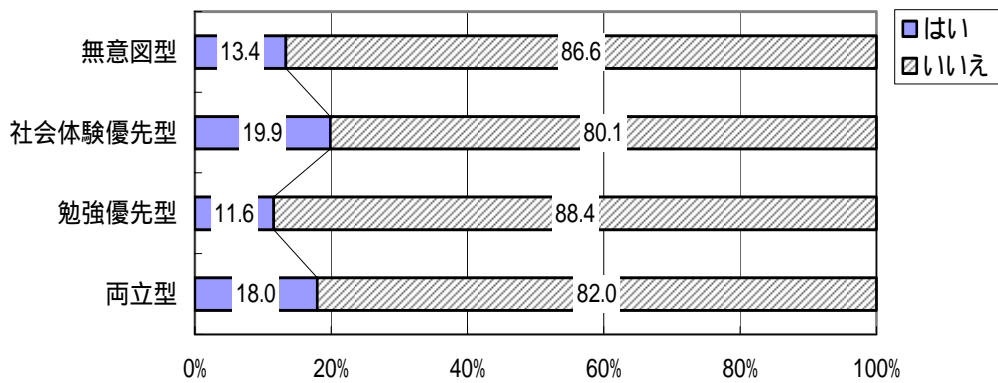
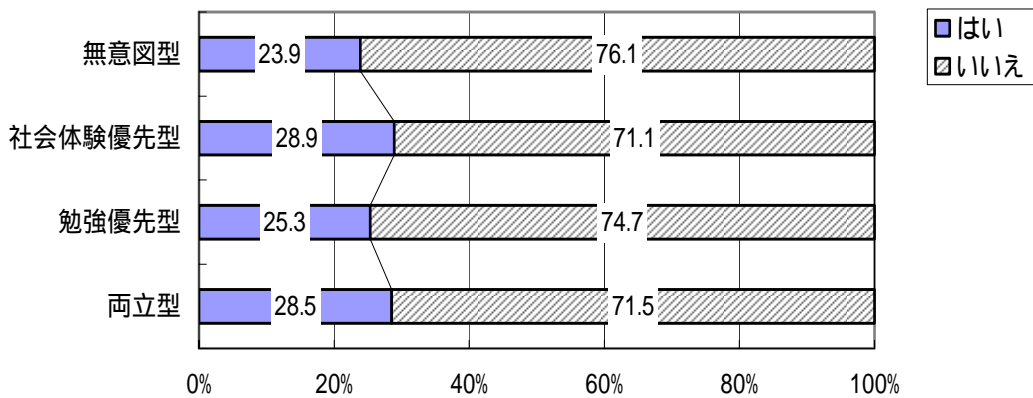


図 - 5 - 4 「父の仕事をよく知っている」-親の子育てタイプ別-



第3節 子どもに対する親の言動

1 子育てにおける自立促進志向

子どもが小学生のころの親の子育ての型に続いて、日ごろの子どもへの言動に目を転じてみよう。具体的には、親の調査票で「日ごろから次のa~hのようなことをどの程度子どもさんに言ってきましたか」と質問して、8つの項目で聞いている（保護者Q4）。概要は次のとおりである。「人に迷惑をかけること」は95.0%、「自分で考えて行動すること」は84.6%、「自分で生きていけるように」は74.1%、「経験を積むこと」は73.7%、「生きがいを見つけること」は67.6%、「勉強すること」は57.0%、「親に迷惑をかけること」は48.8%、「えらくなること」は6.3%である。この中で、「人に迷惑」は大部分に当てはまりほとんど差がない。「えらくなること」は極めて少ない。勉強に関しては、在学者と非在学者で差があり、しかも「非常に言う」は少なく「ある程度は言う」という状態である。

以上の8項目の中で、本章が着目するのは、親が子どもの生活力、自立性、社会経験をどの程度重視しているかという点である。項目は、自分で生きていけるようになること、自分で考え行動すること、たくさんの経験を積むこと、の3項目である。これを自立促進を表すものとみなす。これらの項目は、上に示したとおり、「非常に言う」、「ある程度言う」を合計すると半数を超えているが、現実の実感からするとやや多すぎる印象を受ける。そこで、「非常に言う」に着目すると、3項目ともほぼ4人に1人という割合になり、この方が実感に近い。そこで、5段階尺度の回答を点数化し、自立促進の程度で、高位、中位、低位に分けた。

「自分で生きていくこと」、「自分で考え行動すること」、「経験を積むこと」など、子どもの自立を促す言動をしている親、そうでない親がどのように分布しているかを見よう。

父親の最終学歴別に見ると、中卒者に自立促進志向が低く（図 - 5 - 5）、また、暮らし向きで見ると、ゆとりがある家庭でやや高いという傾向が見られる（図は省略）。子どもの年齢で見ると、年少の方がやや自立促進志向が高い（図 - 5 - 6）。子どもの自立性が高まるにしたがって、自立促進志向は、子育ての重点から後退するというかもしれない。

図 - 5 - 5 親の自立促進志向 - 父親最終学歴別 -

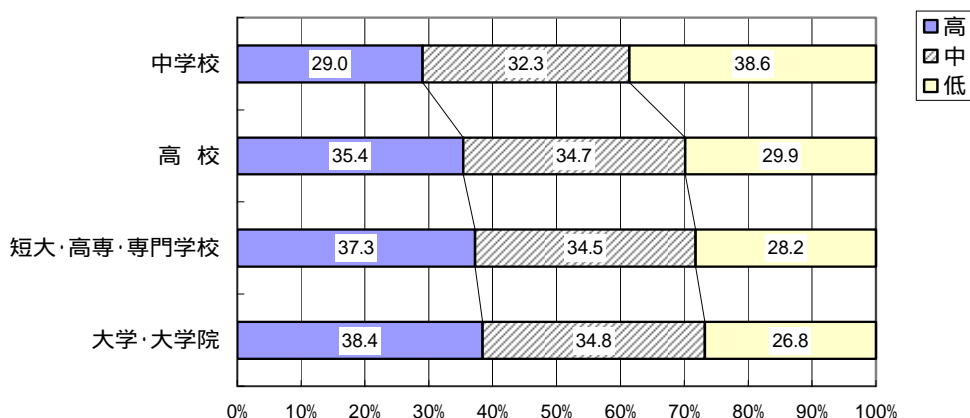
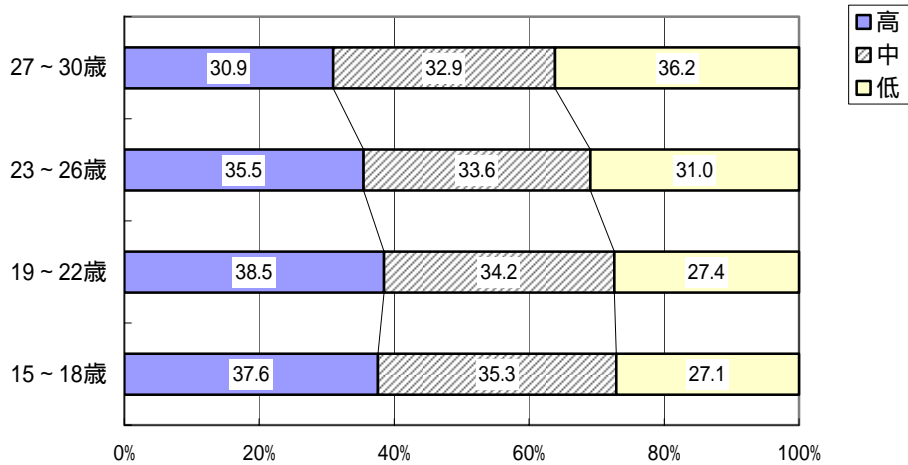


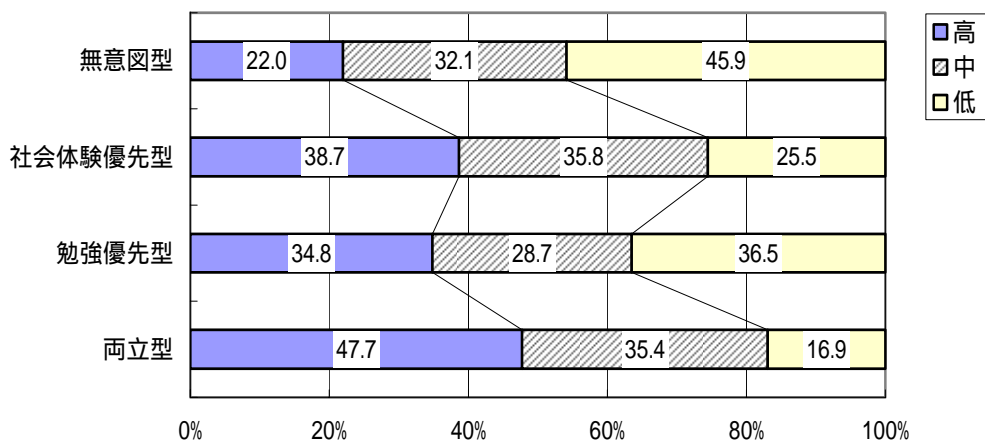
図 - 5 - 6 親の自立促進志向—子どもの年齢別—



次に、小学生のころの子育ての型と現在の子どもへの言動との関係を見てみよう。両者には明確な関係性がある(図 - 5 - 7)。子どもが小学生のころ両立型の親は、その後も自立促進志向が際立って高い。社会体験優先型がそれに続く。一方、無意図型の親は、自立促進型が著しく少ない。また、勉強優先型も無意図型に続いて少ない。なお、親の職業との関係は見られない。

子育ての方法は、子どもの発達に伴って変化するのであるが、それにもかかわらず子育ての型は近似している。親の属性で見ると、高学歴で豊かな親ほど、子育てにおける自立志向性が高い。また、子どもが小さいころから勉学と社会経験を両立させようという志向性も高いという特徴がある。

図 - 5 - 7 自立促進志向 - 子育ての型 -



2 子どもから見た親のイメージ・評価

親の子育て方法や言動と、子どもから見た親のイメージとはどのような関係にあるだろうか。ここ

では、親の言動が自立促進型であるかどうかに着目し、子どもから見た親のイメージ(自分との関係)との関係を探る。まず、父親を見てみよう。自立促進の程度が高い父親ほど、「私に対して厳しい」(図 - 5 - 8)「父の仕事を知っている」(図 - 5 - 9)「父の人生は生きがいのあるもの」(図 - 5 - 10)が多い。次に、母との関係で見ると、「私に対して厳しい」(図 - 5 - 11)「仕事・勉強についてうるさく言う」(図 - 5 - 12)「母の仕事を知っている」(図 - 5 - 13)「母の人生は生きがいのあるもの」(図 - 5 - 14)が、父の場合と同様に勝っている。父母で異なっているのは、「よくわかっている」(父だけ)「仕事・勉強についてうるさくいう」(母だけ)であり、厳しさ、親の仕事への理解、親の人生の評価は、自立促進の程度が高い父母が勝っている。このように、自立促進的な父母は、子どもと妥協せず言うべきことを要求し(厳しいと表現)、父親は子どもとのかかわりを持つことによって子どもの状態を知り理解しているという結果である。そのような親子関係を通して、親の仕事を知り、親の人生を生きがいのあるものと認める子どもが多くなっていると解釈できる。自立促進的な親であることは、これ以後見ていく子どもの意識や行動に明確に反映している。

図 - 5 - 8 「父は私に厳しい」 - 親の自立志向別 -

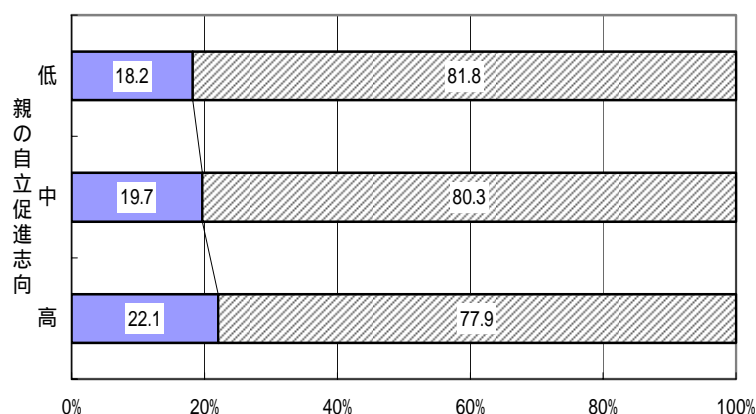


図 - 5 - 9 「父の仕事をよく知っている」 - 親の自立促進志向別 -

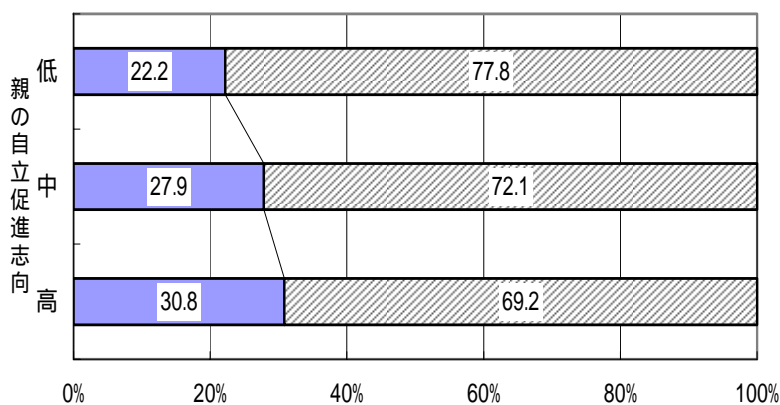


図 - 5 - 10 「父の人生は私からみて生きがいがある」
- 親の自立促進志向別 -

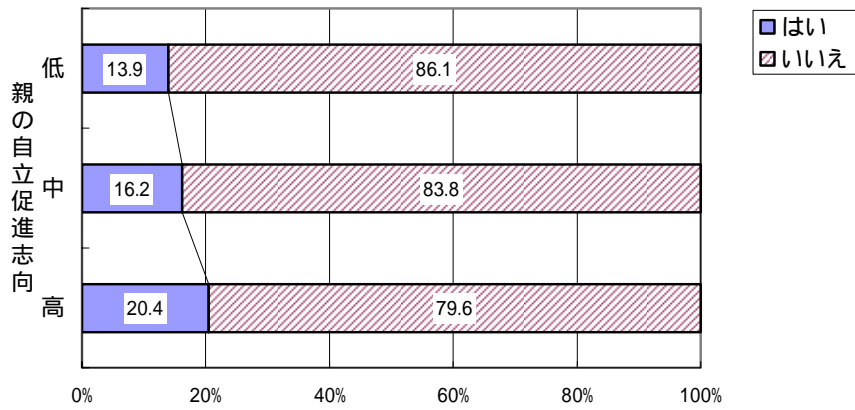


図 - 5 - 11 「母は私に厳しい」
- 親の自立促進志向別 -

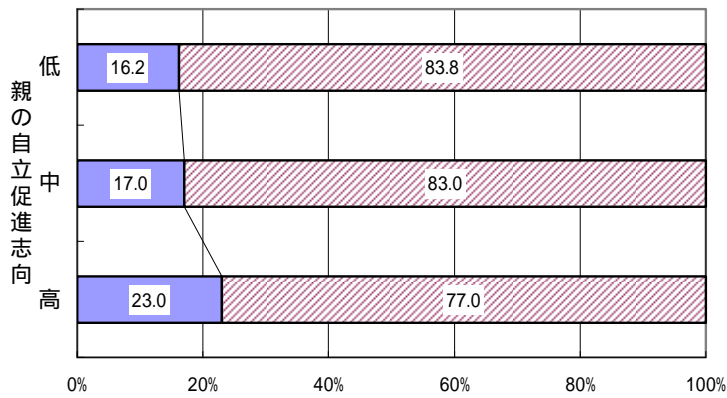


図 - 5 - 12 「母は仕事・勉強についてうるさく言う」
- 親の自立促進志向別 -

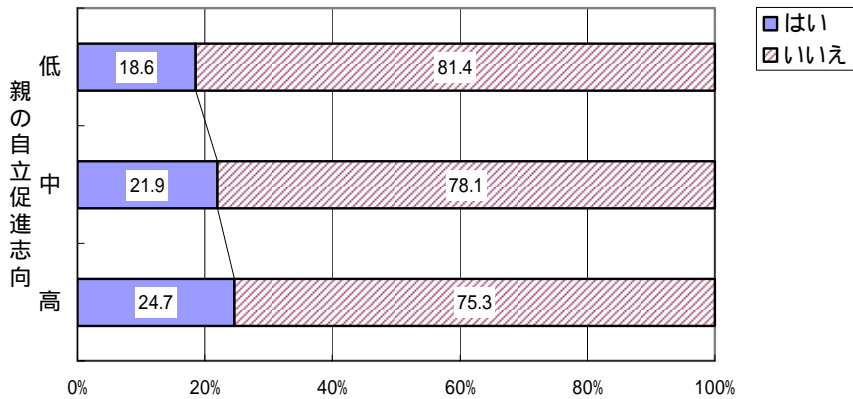


図 - 5 - 13 「母の仕事をよく知っている」
- 親の自立促進志向別 -

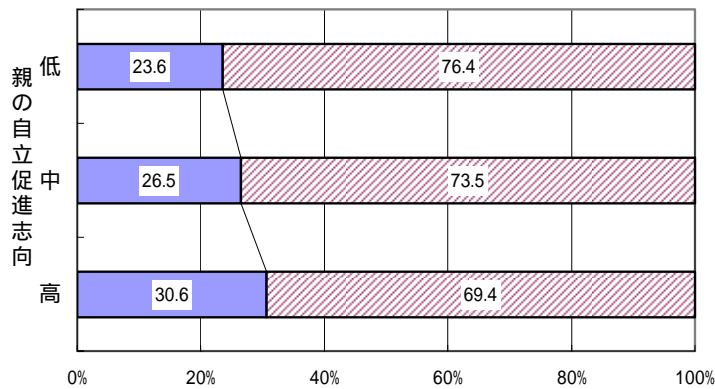
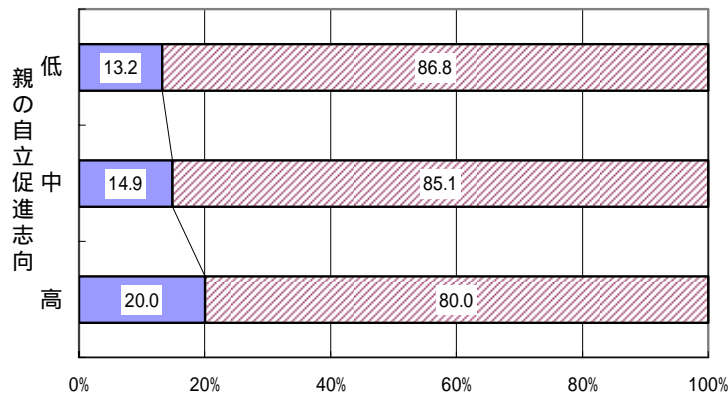


図 - 5 - 14 「母の人生は私からみて生きがいがある」
- 親の自立促進志向別 -



3 子どもの意識・行動

親の自立促進の程度は、子どもの実際の意識や行動とどのように関係しているだろうか。青少年調査票では、14 の考え方や生き方を提示して、自分にあてはまるかどうかを聞いている（青少年 Q47）。それらが親の自立促進の程度とどのような関連性を有しているかを見てみよう。表には示さないがクロス集計の優位差検定結果を見ると、親の自立促進の程度で差異が認められる項目は、「学校卒業後は早く就職して自立すべき」「フリーター・派遣は長期間続けるべきではない」「努力次第で地位や収入は変えられる」「将来について夢を持っている」である。親の自立促進志向が高いほど、子どもは親からの自立規範、安定した職業志向が強く、努力への確信、将来への夢を持っているという結果である。ただし、親の自立促進志向がストレートに子どもの意識や行動に反映しているのか、むしろその背後にある学歴・職業・所得水準などの社会経済階層の反映か、それともそれ以外の要因の反映であるの

かを見極めるためには、より突っ込んだ分析が必要であるが、それについては後にまわして、ここではひとまず先へ進もう。

青少年調査票では、「大人になったという自覚」(青少年 Q10-13)の有無も聞いているが、その結果と親の自立促進志向との関連性は見られない。

同じく青少年調査票では、家事についても聞いている(青少年 Q63)。ここでは普段している家事項目を点数化して、親の自立促進の程度との関係を見たところ、親の自立促進の程度と子どもの家事得点は見事に一致している(図 - 5 - 15, 図 - 5 - 16)。とはいえ、家事に関してはジェンダー差が大きく、親が自立促進的であることによって、ジェンダー差が顕著に埋まるといった状態にはない。

図 - 5 - 15 家事得点(男性) - 親の自立促進志向別 -

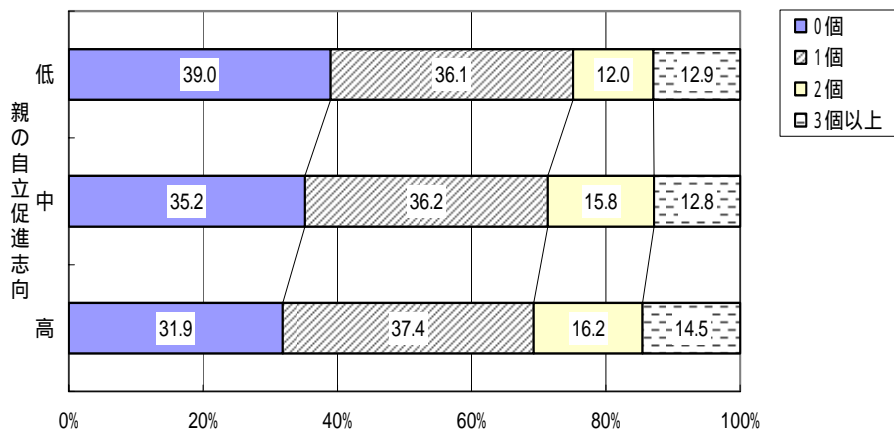
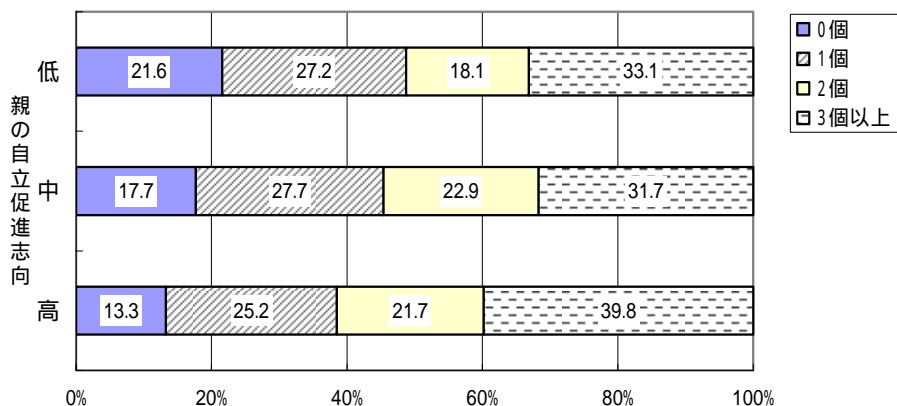


図 - 5 - 16 家事得点(女性) - 親の自立促進志向別 -



最後に、青少年調査票では、本人の性格傾向を表現する16項目を示し、あてはまるものを選択させている(Q63)。その中で、親の自立促進の程度によって有意な差が認められるのは6項目であった。

それは、「友人より優れた能力がある」「何かを決めるとき、迷わず決定するほう」「結果の見通しがつかない仕事でも、積極的に取り組んでいくほう」「どんなことでも積極的にこなすほう」「積極的に活動するのは苦手(これを否定する効果)」「世の中に貢献できる力がある」である。これらの項目は自分に対する自信と物事に対する積極性を示すものであるが、このような傾向が親の自立促進的な子育てと明らかに関連性があることが示されている。

4 親の責任・義務意識

最後に親の責任・義務に関して親がどのような意識を持っているのかを見てみよう。保護者調査票では、子どもを育てるに当たって考えていることを5つの項目で示し、選択させているが(Q2)、その中で「子どもは親の思うようにはならない」「子どもの話をできるだけ聞くことが重要」「伝えたい生き方や価値がある」は、否定する者が1割前後と少ない。子どもは親の思い通りにはならず、子どもの話をできるだけ聞くこと、子どもに伝えたい生き方や価値があることに大多数の親は賛成しているのである。これらの考え方は、日本の親の標準的な規範となっていると言えよう。しかし後述するように、親の仕事を知らない子どもが多いことと、そのことが自立過程の意識や行動と密接な関連を持っていることから見ると、「伝えたい生き方や価値がある」が9割に達していることにはやや疑問を感じる。これら3項目を除外し、「親は子どもの一生に責任を持つ義務がある」「子どもは放っておいても育つものだ」の2項目について見ると、「一生に責任」は、子どもの年齢による差があり、子どもが若いほど一生に責任があると考え親が多いが、その他の属性による差は見られない。「子どもは放っておいても育つ」とは思わないは、母親、高学歴、暮らしにゆとりがある親に多い傾向が見られる。

第4節 「社会志向性」と親の子育ての関係を見る

1 子どもの社会志向性

成長過程で社会的視野が広がり、社会的・公共的世界へと目が開かれていくはずだが、現実には若者の社会的関心は低迷しており、社会活動への参加も限られている。社会への関心・社会参加への意欲は、成長過程の様々な要因に影響されて形成されるわけだが、その中で親はどのような影響を与えてきただろうか。

青少年調査票では、社会への関心や社会参加への意欲に関連する項目を挙げて、当てはまるかどうかを聞いている(Q54)。その中で、「身近な人間関係を大切にしている」が8割を超えて際立って多く、「地域、地方行政、国政への関心」は低調である。「社会で問題になっていることへの関心」はやや多く3割台、「世界情勢・国際問題への関心」がそれに続くのは、近年の国際情勢の激化が背景にあるからだろうか。

そこで、「身近な人間関係」項目を除き、選択された項目数を足して得点化し、これを社会志向性とする。これと親の自立促進志向との関連を見た結果、親が自立促進的であるほど、子どもの社会志向

は高い(図表は省略)。ボランティア活動の有無や今後の意向に関する設問から、「今、している」又は「今はしていないが、積極的にしてみたい」を選択した者と、親の自立促進の程度との関係を見た。ここでも、社会志向で見たのと同じ傾向がある。このように、社会への関心や社会参加の意欲を持ち実践している若者にとって、子どもの自立を奨励する親の影響は無視できないものがありそうだ。これまでの分析の結果、子育てにおける親の自立促進志向の程度が、子どもの意識や行動パターンと密接な関係があることが、複数の変数を通して分かってきた。自立促進型の子育てが、子どもの自立性、積極性や主体性、社会への関心や社会参加意欲にプラスの効果をもたらしている。

2 社会志向性を規定する要因分析

次に子どもの社会志向性について分析する。社会志向性はどのような要因によって規定されているだろうか。ここでは、親の影響に着目して、社会志向性を被説明変数とする重回帰分析を行った。社会志向性は1から4の尺度であり、順に「なし」「低」「中」「高」を点数化した。説明変数は次のとおりである。まず個人属性としては、性別、年齢、学歴(中高卒・短大専門・大卒以上)を用いる。親に関する変数としては、父学歴・母学歴(中卒・高卒・短大専門卒・大卒以上)、親の暮らし向き(ゆとりあり・苦しい)、小学校のころの子育て方法(両立型・勉強優先型・社会体験優先型・無意図型)、自立促進志向の程度(高位・中位・低位)、父の仕事(知っている・知らない)、父の人生の生きがい(あり・なし)を用いる。

この重回帰分析の結果が表 - 5 - 1である。男女全体では、有意な効果を持つ変数は、性別、母の学歴、本人の学歴、父の仕事を知っているかどうか、父の人生は生きがいがあると思うか、である。性別に比べると男性の方が社会志向がやや高い。母の学歴が高い方が社会志向はやや高い。一方、父の学歴は効果が見られない。本人の学歴では、大卒者の社会志向が大きく上回っている。親子関係に関しては興味深い結果となっている。子どもが父親の仕事を知っている方が、社会志向が高い。また、父親の人生は生きがいがあると思っている方が、社会志向が高い。小学生のころの子育て方法も有意な効果がある。両立型と比べ、勉強優先型と無意図型の子育ての方が、社会志向が低く、社会体験優先型は男女で逆の効果がある。男性の場合は高く、女性の場合は低い。以上の結果から、社会志向性は、親子ともに高学歴であるほど高く、子育て方法が勉強も社会体験も重視する両立型で高い。また、父親の仕事を知っていて、父親の人生を生きがいのあるものだったと認めている子どもの方が、社会志向性が明確に高い。

以上の分析から、本人の学歴と母親の学歴が高く、小学校のころの子育てが両立型と社会体験優先型であることが社会志向性を高め、さらに親の仕事をよく知っており、親の人生を評価できることと、社会志向性の高さが関連性を持っていることが分かった。それにもかかわらず、社会志向性の水準は決して高くはない。関心を持っている者は2割を切っている。ということは、親の子育て方法や親子関係という要因以外に、子どもの社会志向を阻害する障害があることが予想される。それが何である

のかを発見するためには、さらに研究が必要である。本調査の範囲で指摘できることは、小学生のこ
ろの子育てが、社会体験型や両立型であった者でさえも、親の仕事をよく知っている割合が低く、親
の人生に対する評価が極端に低いという点である。ここから推測できるのは、親が子育てにおいて社
会体験を重視したと自負している場合でさえも、親子関係を媒介する実質的な内容が希薄ではないか
ということである。そこで、さらに分析を進めよう。

表 - 5 - 1 子どもの社会志向性を規定する要因分析
- 子どもの社会志向性得点の重回帰分析 -

		全体			男性			女性		
		B			B			B		
子どもの性別	男性	0.128	0.058	**						
	女性	-	-							
父の学歴	中学	-0.112	-0.031		-0.072	-0.019		-0.147	-0.043	
	高校	-0.096	-0.044	+	-0.120	-0.053		-0.063	-0.029	
	短・高専・専門	-0.091	-0.023		-0.119	-0.030		-0.054	-0.014	
	大卒	-	-		-	-		-	-	
母の学歴	中学	-0.204	-0.046	+	-0.243	-0.052		-0.152	-0.036	
	高校	-0.227	-0.103	**	-0.238	-0.105	*	-0.205	-0.095	*
	短・高専	-0.156	-0.063	*	-0.247	-0.098	*	-0.075	-0.030	
	大卒	-	-		-	-		-	-	
親の暮らし向き	ゆとりあり	-0.041	-0.019		-0.037	-0.016		-0.050	-0.023	
	苦しい	-	-		-	-		-	-	
子どもの学歴	中高卒	-0.589	-0.268	***	-0.555	-0.243	***	-0.619	-0.290	***
	短・高専・専門	-0.353	-0.132	***	-0.268	-0.082	**	-0.389	-0.163	***
	大卒	-	-		-	-		-	-	
子どもの年齢	15-18歳	0.121	0.052	+	0.147	0.063		0.107	0.047	
	19-22歳	-0.016	-0.007		0.065	0.026		-0.076	-0.032	
	23-26歳	-0.017	-0.006		0.091	0.033		-0.103	-0.040	
	27-30歳	-	-		-	-		-	-	
父の仕事	知っている	0.261	0.106	***	0.332	0.133	***	0.199	0.082	***
	知らない	-	-		-	-		-	-	
父の人生は生きがいがある	思う	0.498	0.171	***	0.454	0.148	***	0.529	0.191	***
	思わない	-	-		-	-		-	-	
親の子育て態度 (小学校の頃)	勉強優先型	-0.143	-0.034	+	-0.007	-0.002		-0.253	-0.062	*
	社会体験優先型	-0.021	-0.010		0.165	0.072	*	-0.172	-0.079	**
	無意図型	-0.114	-0.046	*	-0.013	-0.005		-0.202	-0.083	**
	両立型	-	-		-	-		-	-	
親の自立促進志向	高	0.048	0.021		0.049	0.021		0.048	0.021	
	中	-0.004	-0.002		-0.007	-0.003		-0.001	0.000	
	低	-	-		-	-		-	-	
(定数)		2.519	***		2.480	***		2.637	***	
F値			19.562	***		9.155	***		12.097	***
R ²			0.120			0.117			0.129	
調整済みR ²			0.114			0.104			0.118	
N			2900			1329			1571	
B : 偏回帰係数 : 標準化回帰係数										

注) ***:P<.001 **:P<.01 *:P<.05 *:P<.10

第5節 「子どもの自立規範」「将来の夢」と親の子育て方針の関係を見る

1 子どもの自立規範を規定している要因

次に、若者の自立に関する規範意識は、親の子育て意識や言動とどのような関係を持っているかを

分析する。「学校を卒業したら、できるだけ早く就職して親から自立すべきだ」を自立規範と押さえ、これを被説明変数とするロジスティック回帰分析を行った(自立規範が「ある」を1とする)。説明変数は、社会志向性の重回帰分析に用いたものと同じ変数群である。その結果が表 - 5 - 2 である。有意な効果を持つ変数は、親の暮らし向き(男性のみ)、子どもの最終学歴、子どもの年齢、父の仕事を知っている、自立促進志向の程度(男性のみ)である。親の学歴は効果がない。親の暮らし向きにゆとりがある方が自立規範は弱い、本人の学歴は高い方が自立規範は強くなっている。一般的に、高学歴ほど暮らし向きにゆとりがあるから、この結果は一見したところ相反している。恐らく、親の豊かさは自立心を弱めるが、高学歴はそれを抑制する効果を持っているということだろう。子どもの年齢が18歳までは自立規範が極めて強く、その後低下している。学校卒業や就職を近い将来に控えた年齢層と、その段階を終了した年齢層では自立規範の意味するものが異なり、年齢とともに規範性が消えて現実性が高まるためであろう。また、男性の場合、父の仕事を知っている男性の方が自立規範が強い。また親が自立促進的であるほど自立規範が強い。親が職業モデルと成りえていることが自立を促し、さらに親の自立促進的な言動も自立を促している。しかしこの傾向は女性には見られない。ここでは母親の仕事を知っているという変数は除外したため、母娘間の関連性については見ることができないが、経済的自立や就職という課題は、女性より男性にとって自立の要件として重要と考えられているということではなかろうか。

表 - 5 - 2 子どもの自立志向性を規定する要因分析
自立志向ありを1とするロジスティック回帰分析

		全体		男性		女性				
		B	Exp(B)	B	Exp(B)	B	Exp(B)			
子どもの性別	男性	0.064	1.067							
	女性	-	-							
父の学歴	中学校	-0.036	0.965	-0.227	0.797	0.138	1.148			
	高校	0.013	1.013	-0.245	0.782	0.248	1.281	+		
	短大・高専・専門	-0.113	0.893	-0.295	0.745	0.105	1.110			
	大学・大学院	-	-	-	-	-	-			
母の学歴	中学校	0.028	1.029	-0.067	0.935	0.050	1.051			
	高校	-0.081	0.922	0.091	1.095	-0.256	0.774			
	短大・高専・専門	-0.177	0.838	-0.242	0.785	-0.164	0.849			
	大学・大学院	-	-	-	-	-	-			
親の暮らし向き	ゆとりがある	-0.238	0.789	**	-0.371	0.690	**	-0.165	0.848	
	苦しい	-	-	-	-	-	-	-	-	
子どもの学歴	中・高卒	-1.138	0.320	***	-1.162	0.313	***	-1.165	0.312	***
	短・高専・専門	-0.331	0.718	**	-0.449	0.638	*	-0.297	0.743	+
	大学・院	-	-	-	-	-	-	-	-	-
子どもの年齢	15~18歳	0.947	2.578	***	0.738	2.092	***	1.126	3.084	***
	19~22歳	0.562	1.754	***	0.476	1.609	*	0.644	1.904	***
	23~26歳	0.049	1.051		-0.275	0.760		0.289	1.335	
	27~30歳	-	-	-	-	-	-	-	-	-
父の仕事	知っている	0.249	1.283	**	0.301	1.351	*	0.215	1.240	+
	知らない	-	-	-	-	-	-	-	-	-
父の人生は生きがいがある	思う	0.192	1.212	+	0.211	1.235		0.193	1.212	
	思わない	-	-	-	-	-	-	-	-	-
親の子育て方法(小学校の頃)	勉強優先型	-0.080	0.923		0.164	1.178		-0.272	0.762	
	社会体験優先型	-0.020	0.980		0.125	1.133		-0.129	0.879	
	無意図型	-0.181	0.835		-0.169	0.845		-0.179	0.836	
	両立型	-	-	-	-	-	-	-	-	-
親の自立促進志向	高	0.252	1.287	*	0.541	1.717	***	0.033	1.033	
	中	0.121	1.129		0.200	1.222		0.093	1.098	
	低	-	-	-	-	-	-	-	-	-
定数		-0.192	0.825		-0.016	0.984		-0.264	0.768	
N			2755			1268			1487	
モデルの 2			166.326	***		110.425	***		80.32	***
-2 対数尤度			3556.076			1610.421			1920.567	

注) ***:P<.001 **:P<.01 *:P<.05 *:P<.10

2 「将来の夢がある」ことを規定している要因

ここまでの分析から、スムーズな自立の達成は、自立規範や自立可能条件だけでなく、自立に向けた動因があるのではないかと推測される。その点で、「将来について夢を持っているか」は自立の直接的要件ではないが、それ自身重要な意味を持っているように思われる。将来への夢を培う機会は多岐に及ぶであろうが、その中で親の影響は軽視できないであろう。そこで、「将来の夢」を被説明変数とするロジスティック分析を行った。説明変数は先の2つの分析と同様である。その結果が表 - 5 - 3である。まず個人属性である年齢の効果は大きい。18歳までは他の年齢層より「将来の夢を持っている」が著しく多い。この傾向は女性ほど顕著で、年齢上昇に伴って低下していく。性別に有意な効果があり、男性の方が「夢を持っている」が少ない。女性の場合は学歴にも優位な効果があり、学歴が低いほど「夢がある」が少ない。一方、男性は自分の学歴には効果が見えないが、父親の学歴には効果があり、父親の学歴が低いと「夢がある」が少ない。女性の方はこのような関係は見られない。親子関係を見ると、「父の仕事を知っている」、「父の人生は生きがいがある」、の2つの変数は、男女ともに有意な効果がある。つまり、父の仕事を知っている方が、また父親の人生は生きがいがあると思っている方が、将来に夢を持っている。また、小学校のころの子育てのタイプも有意な効果を持っており、勉強優先型（女性のみ）、無意図型のどちらも、両立型に比べ、「夢がある」が少ない。最後に、親の言動が自立促進型であることが、女性の場合のみ、有意な効果を持っている。親が自立促進的である女性の方が、夢を持っているのである。

なお親の自立促進志向性は、多変量解析では単純なクロス集計結果ほどには直接的な効果はみられない。とはいえ、「自立規範」、「将来の夢」の分析を通じて、軽視できない重要な要因になっている。その際、親の自立促進志向は男性と女性に異なる効果をもたらしている。親の自立促進志向性が高い場合、男性は自立規範（＝就職や経済的自立の自覚）が高まることを先に見たが、女性は、将来の夢を持つことが可能になっている。女性にとっての自立は、男性のような職業的・経済的自立という固定した内容を持っていないからではないかと思われる。

表 - 5 - 3 将来の夢があることを規定する要因分析
将来の夢ありを1とするロジスティック回帰分析

		全体		男性		女性				
		B	Exp(B)		B	Exp(B)	B	Exp(B)		
子どもの性別	男性	-0.191	0.826	*						
	女性	-	-							
父の学歴	中学校	-0.602	0.548	**	-0.646	0.524	*	-0.514	0.598	+
	高 校	-0.128	0.880		-0.321	0.725	*	0.066	1.069	
	短大・高専・専門学校	-0.369	0.691	*	-0.418	0.658	+	-0.307	0.736	
	大学・大学院	-	-		-	-		-	-	
母の学歴	中学校	0.345	1.411		0.632	1.881	+	0.125	1.133	
	高 校	-0.124	0.884		0.239	1.270		-0.445	0.641	+
	短大・高専・専門学校	0.050	1.051		0.124	1.132		0.004	1.004	
	大学・大学院	-	-		-	-		-	-	
親の暮らし向き	ゆとりがある	0.118	1.125		0.105	1.111		0.174	1.190	
	苦しい	-	-		-	-		-	-	
子どもの学歴	中・高卒	-0.396	0.673	**	-0.025	0.975		-0.822	0.439	***
	短大・高専・専門学校	0.077	1.080		0.311	1.364		-0.013	0.987	
	大学・院	-	-		-	-		-	-	
子どもの年齢	15～18歳	1.293	3.644	***	0.881	2.414	***	1.839	6.291	***
	19～22歳	0.761	2.141	***	0.632	1.882	**	0.927	2.527	***
	23～26歳	0.452	1.572	**	0.669	1.952	**	0.296	1.345	
	27～30歳	-	-		-	-		-	-	
父の仕事	知っている	0.520	1.682	***	0.501	1.650	***	0.579	1.784	***
	知らない	-	-		-	-		-	-	
父の人生は生きがいがある	思う	0.841	2.320	***	0.952	2.590	***	0.746	2.109	***
	思わない	-	-		-	-		-	-	
親の子育て方法 (小学校の頃)	勉強優先型	-0.467	0.627	*	-0.226	0.797		-0.720	0.487	**
	社会体験優先型	-0.014	0.986		0.011	1.011		-0.019	0.981	
	無意図型	-0.479	0.619	***	-0.450	0.637	*	-0.502	0.606	**
	両立型	-	-		-	-		-	-	
親の自立促進志向	高	0.103	1.109		-0.144	0.866		0.359	1.432	*
	中	-0.073	0.930		-0.186	0.831		0.028	1.028	
	低	-	-		-	-		-	-	
定数		-1.137	0.321	***	-1.459	0.232	***	-1.148	0.317	***
N			2755			1268			1487	
モデルの 2			273.222	***		90.92	***		224.937	***
-2 対数尤度			3298.829			1513.879			1736.71	

注) ***:P<.001 **:P<.01 *:P<.05 *:P<.10

第6節 考察と結論

本分析の着眼点は、親の子育ての型と親子関係が、若者の自立の諸相にどのような影響を及ぼしているかという点にあった。自立の諸相として、社会志向性、自立規範、将来の夢に着目し、併せて意識や行動の実態を見た。小学校のころの子育ての型は、親が勉強と社会体験に関心を払ったかどうかに着目した。社会体験優先型が4割を占めて最も多く、勉強優先型は1割に満たず、これら2つの型の中間にあるのが両立型と無意図型でそれぞれ25%前後であった。一方子どもに対する親の日ごろの言動から、子どもの生活力、自立性、社会体験に関連するものを抜き出し、それを自立促進志向の程度とみなした。「自分で生きていけるようになること」、「自分で考え行動すること」、「たくさんの経験を積むこと」を子どもに対して「非常に言う」親は4人に1人という状態であった。子育ての型と自立促進志向の程度とは密接な関係があり、両立型の子育てと高い自立促進志向とが結びついている。これらの特徴を持つ子育ては、若者の自立を促進し、自立規範を強化し、しかも将来の夢を持つことを可能にしている。また、両立型子育ては若者の社会志向性を高めている。このような子育ては、親子

双方の学歴が高く、暮らしにゆとりがある層により多くみられる。

このように、子どもの勉強と社会体験の両面への親の関心が、若者の社会的自立を促す重要な条件となっていること、また、子どもに向かって自立を促す言動をしていることが、若者の意識・行動に明らかにプラスの効果をもたらすという結果は、若者の社会的自立にとって必要な条件は何かを検討するうえで重要なヒントになるだろう。更に指摘したいのは、子育ての型と密接に関係していると思われる親子関係の内容が社会的自立の条件になっていることである。「父親(母親)の仕事をよく知っている」、「父親(母親)の人生は生きがいのあるもの」という2つの項目は、両立型と社会体験優先型により多く、自立促進志向の高い親を持っている方に多いが、これらは「子どもの社会志向性」、「自立規範」、「夢を持っている」のどの項目にも影響を及ぼしているだけでなく、ポジティブな意識・行動・性格とも結び付いている。勉強と社会体験重視という親の子育て方針も、子どもの自立を促進する言動も、それだけでは若者の社会的自立に対して効果を発揮しないだろう。そこに、親子の密接なコミュニケーションと、それらを介した親への理解、親から子への伝達があることが重要な意味を持っている。このような親子関係を通して、「親の仕事をよく知り」、「親の人生は価値あるもの」という認識・評価が若者に生まれ、そのことが、社会的自立性を高めていると見ることができよう。若者の社会的自立が遅くなり、自立の困難も生じている状況の中で、親子関係が重要な鍵を握っていることが確認できたことの意味は大きい。しかし、このことと同時に、「父親の仕事を知っている」、「父親の人生は生きがいがあるもの」と肯定している若者が2割前後と少ないという実態に留意する必要がある。親の背中も中身も知らないことが、若者の社会的自立を困難にしていることが確認されたといったらよさそう。

引用・参考文献

- 苅谷剛彦 1995 大衆教育社会のゆくえ 中公新書
- 藤田英典 1999 変動社会における青少年の生活と意識 総務庁青少年対策本部 第6回世界青年調査細分析報告書 第1章
- 樋田大二郎, 耳塚寛明他編 2000 高校生文化と進路形成の変容 学事出版
- 宮本みち子 2004 ポスト青年期と親子戦略 勁草書房
- 宮本みち子 2005 家庭からみる 小杉礼子編著 フリーターとニート 第3章 勁草書房
- 宮本みち子・岩上真珠・山田昌弘 1997 未婚化社会の親子関係 有斐閣
- 山田昌弘 1999 パラサイトシングルの時代 ちくま新書